

# e-dream-s 通信

No. 74 発行：2007年2月11日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

## 目次

- |                                |      |       |
|--------------------------------|------|-------|
| 1. We are not e-dreams         | 辻荘一  | p. 2  |
| 2. ソフトの時代、ハードの形                | 井川好二 | p. 4  |
| 3. 納豆狂騒曲                       | 中川房代 | p. 9  |
| 4. Rip Van Winkle が見る 21 世紀の学校 | 塚本美紀 | p. 12 |



ごっごつした殻を割ると中から白いパルプ質の果肉に包まれたカカオ豆が 30~40 粒入っている。マレーシアのカカオ生産は世界で第 7 位。

(撮影 山田昌子氏)

## We are not e-dreams

辻 莊一

「樹を見て森を見ず」という言葉があります。たしかに細部に気を取られるあまり視野が狭くなって、全体が見えなくなることはよくあります。一方で「神は細部に宿る」(ミース・ファンデルローエ<sup>1</sup>)という言葉もあります。

この「神は細部に宿る」という言葉は、「美しさと機能の追求はディテールの追求であり、細部まで手を抜かないこと、細部の作り込みこそが全体の完成度を決める」と解釈されていますが、さらに広げて、小さなミスを見逃すことによって大きな失敗を招く、逆に言えば小さなミスを見逃さないようにすれば大きな失敗が防げるというような文脈で使われることも多いようです。窓がガラスの割れている家を少なくすることからニューヨークの治安改善<sup>2</sup>に取り組んだジュリアーニ元ニューヨーク市長がよく例に出されます。

---

<sup>1</sup> Ludwig Mies van der Rohe、1886年3月27日アーヘン - 1969年8月17日シカゴ) は20世紀のモダニズム建築を代表するドイツの建築家。近代建築の四大巨匠(ル・コルビュジエ、フランク・ロイド・ライト、ヴァルター・グロピウスと共に)の1人。

<sup>2</sup>ジュリアーニ前市長は治安の悪い地域に同じ車(新車)を用意して、路上駐車させて、この「神は細部に宿る」ということを実験したのだった。まず1台は落書きを放置した。もう1台は落書きがあつたらすぐにきれいに清掃したのである。すると、落書きを放置した1台は1週間後にはボディに傷を付けられたり、窓ガラスを割られたり、しまいには車のエンジンまで盗まれてしまったそうである。一方、落書きを毎回消していた車は、それ以上荒されることはなかったそうである。ジュリアーニ前市長はこの結果をもとに、NYの犯罪撲滅、治安回復に乗り出したのである。

まず、「割れ窓作戦」。これは、窓ガラスが割れている家に5000人の警官を訪問させて「お宅の家の窓が割れていますよ」と1件1件注意して回らせたのである。また、今までにNYの名物であつた地下鉄の落書きをいちいち丁寧に消していったのである。その結果、数年後にはNYの治安は見違えるように回復したのであった。

因みに、「割れ窓理論(Broken Windows)」とは、米ニュージャージー州ルトガーズ大学刑事司法学部教授のジョージ・ケリング博士が提唱した理論で、「割れ窓とは、この言葉のとおり建物やビルの窓ガラスが割られ、そのまま放置しておく外部からは建物やビルは管理されていないと認識され、割られる窓ガラスは増える。建物やビル全体が荒廃し、それは更に地域全体が荒れていく」という理屈である。

このことを別の角度から説明すれば、窓ガラスが割れている家はその背後に割れた窓ガラスを放置するという生活実態があるということになります。つまり細部から全体像が垣間見えるということでもあります。もちろん常に何にでも適用できるというわけでもないでしょうけれども、細部は細部にとどまらず全体像をも含むという考え方で実態を正確に言い当てられることも多いのも事実です。

e-dream-s/ACROSS の読者のために身近な例を挙げれば、ACROSS の発音訓練で訓練生のある「音」が改善されない場合、それは多くの場合その「音」だけの問題ではなく練習する方法、回数、さらには訓練に対する姿勢の問題を含む場合が多いのは、多くの実習生に同意してもらえるところでしょう。またレストランのレベルとか客に対する姿勢は従業員のちょっとした物腰とか、テーブルに置かれたナプキンのたたみ方などに表れたりするものです。さらに私は門外漢なのでわからないことも多いのですが、音楽とか美術などの分野にも同じことが言えるのでしょう。本家本元の建築はもちろん。

これを作る側ではなく鑑賞する側から言えば、作者の細部へのこだわりが理解できなければ、その作者ひいてはその分野全体のことも本当には分からないということになります。

さて長々と言わずもがなのことを述べ立ててきましたが、今回私の言いたいのは「e-dream-s」「ACROSS」「iN-PROCESS」という私たちにとって大切な名前が正しく記述されないことが多いということです。それぞれ「e-dreams」「Across」「IN-PROCESS」と書かれることのなんと多いことか。しかもこの間違いを当のe-dream-s/ACROSS のメンバーがすることが、また多いのです。

私は「e-dream-s/ACROSS」のメンバーであって「iN-PROCESS」を使って学びました。「e-dreams/Across」という組織も、「IN-PROCESS」という冊子もこの世に存在しません。細かいことにこだわりすぎでしょうか？私はそうは思いません。この間違いの背後にはその間違いをする雑駁な精神があるのです。

神は細部に宿るのです。

# ソフトの時代、ハードの形

井川 好二

藍染めの暖簾をくぐって、狭い入り口の引き戸を開けると、三和土<sup>3</sup>になった土間に、予想外の広さを感じる。

「いらっしゃいませ」

足下の照明に導かれるように、テーブルへつくと、分厚い木のテーブルがなんだか懐かしい。窓の外は、暮れなずむ街。早い春が、そこまで来ている郊外の私鉄の駅近。表通りから、一筋入った蕎麦屋である。

「落ち着きますなあ」

「そやな」

「このテーブルの高さ、丁度よろしいなあ」

「ホンマに。食器を置いて、箸の上げ下ろしが、自然にできる」

「センス、ここへは・・・」

「久しぶりや」

「ソフト」が大切な時代である。つまり、機械や建物などの「ハード」を使って、何をするのか、何ができるのかが、大事な時代なのである。こんな使い方がしたい、が「モノづくり」をリードする。

だから、そういうソフト主導時代だから、その時代に相応しいハードの革新が必要とも云える。ハードからの挑発。ソフトが大切な時代だからこそ、あるべきハ

---

<sup>3</sup>コンクリートで固めた土間。古くは叩き土に石灰・水などを加えて練ったものを塗り、たたき固めて仕上げた土間。[明鏡国語辞典]

一ドの形を、世の中へ叩き出す、知識も技術も必要な時代なのである。

流れてくる jazz は、山下洋輔のバラード。年寄りのようにくどくどしく、かと思えば、びっくりするほど挑戦的なピアノ・ソロが、三和土と太い木のテーブルに跳ね返って、かえって新鮮さを増す。

「蕎麦をもらう前に、ちょっと飲みたい」

「お酒どすね」

「うん、ジャパンやな」

「はい」

蕎麦がき<sup>4</sup>と一緒に運ばれて来たのは、こごみ<sup>5</sup>と蓮根の天ぷら。おおぶりの伊賀焼<sup>6</sup>の器に乗っているのを、珠洲の能登塩<sup>7</sup>で食べる。酒は、片口<sup>8</sup>に入った加賀の「天狗舞」の山麩吟醸。猪口に注いで飲むと、喉を霊峰白山<sup>9</sup>の静謐が、あらあらと走る。

「こごみが、美味しい」

「ちょっと早いけど」

「春どすな」

---

<sup>4</sup>そば - がき【蕎麦掻き】蕎麦粉を熱湯でこねて、餅状としたもの。醤油・つゆをつけて食す。そばねり[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

<sup>5</sup>(その形状から)クサソテツの別称、また、その若芽の山菜としての名称。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

<sup>6</sup>いが - やき【伊賀焼】三重県阿山郡阿山町丸柱・楨山から産する陶器。桃山時代の領主筒井氏、次いで藤堂氏の時代にかけて豪快な茶道具が焼かれた。また、小堀遠州の焼かせたものもある。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

<sup>7</sup>能登塩【のとじお】能登半島沿岸の揚浜塩田で生産された塩。加賀藩は塩を専売制とし、米を塩土しおじ(塩作り農民)に前貸しして塩で返納させた。珠洲(すず)郡の場合、1反歩の塩田から鉄釜を用いた3~4人の労働で年間300俵前後の生産があった。明治以降衰退し、1960年頃廃止。[岩波日本史辞典]

<sup>8</sup>一方だけに注ぎ口のある器。特に長柄の銚子にいう。[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

<sup>9</sup>はく - さん【白山】石川・岐阜両県にまたがる成層火山。主峰の御前峰ごぜんみねは標高2702メートル。富士山・立山と共に日本三霊山の一。信仰や伝説で知られる[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

現代のこじやれた蕎麦屋には、分厚い木のテーブルと、ざっくりとした陶器と、大人の苦みを含んだジャズが、よく似合うのである。

「東南アジアで学校作る話、今年がヤマヤと思ってるねん」

「いよいよ、どすか？」

「そや。今年いっぱい結論を出すつもり」

「タイミングは大事どす」

「Take a good timing か」

「そうどす」

東南アジアに、e-dream-s 出資の小学校を、創設しようと云う機運が高まっている。カンボジア、ラオス、タイなどが候補にあがっていて、まず、一校を立ち上げ、それを足がかりに、東南アジアで10校くらいの規模にしたい。むろん、資金集めも、しっかりやる。

ただ学校の建物を建てるだけではなく、運営やカリキュラムの策定にも参画できればと思っている。日本からの教育ボランティアやインターンシップ<sup>10</sup>の窓口になりたいとも思っているし、現地校の教員研修なども引き受けることも考えている。東南アジアにとっても、日本にとっても、プラスになるプロジェクトにしたいのである。

つまり、革新的なソフトを支えるタフなハードを作り、新しいアジアと日本を生み出す、人材を育てたいと思っているのである。

---

<sup>10</sup>◆インターンシップ(internship)〔教育・学校問題〕大学生などが、在学中に自らの専攻や将来の進路と関連した就業体験をする制度。産学連携の一環であるこの制度は、専修学校や一部の理工系の大学で実施されてきたが、文部科学省・経済産業省・厚生労働省の3省と大学・企業等と共同での積極的な取組みが始まった。形骸化していた就職協定廃止を機に、1997(平成9)年5月、政府の「経済構造の改革と創造のための行動計画」でも推進の方向が示された。この制度は、大学での研究が社会と乖離している状況を改善し、また学生に職業に関する情報に接する機会を提供することによって自己の適性を把握し、早期の離転職を防ぐことができるという効果をもねらっている。ただ、企業による新たな青田買いにならないか、報酬を支払うか、教育活動の一環として単位を認定するか等の問題も残っている。[株式会社自由国民社 現代用語の基礎知識 2005年版]

「お手伝いさせておくれやす」  
「ありがとう」  
「お役にたてるんやったら、うれしおす」  
「お願いします」  
「たいした事は、何にもできませんけど」  
「頼みます」  
「いいえ、こっちこそ。ただ、目的が一つ見つかるのは、嬉しいことどす」  
「そや。今のジャパンに必要なものは、目的」  
「ほんに」  
「存在の目的や」

今まで、アジアに学校を寄付することを、考えなかったわけではない。しかし、その度にハードよりもソフトと考えて、二の足を踏んで来た。

今思えば、必要なことは、ハードを作るのと、ソフトを導入することを、同時に取りかかること。両方できること

「酒をもうちょっと貰おうか？」  
「はい、おめでた、どすから」  
「ホンマや。めでたい、めでたい」

調子に乗って、片口の天狗舞をかなり飲んで、気持ち、晴れた空を行く天狗<sup>11</sup>のように、清々しくなったころ、ようやくお目当ての蕎麦が運ばれてきた。おろし蕎麦である。冬は辛み大根<sup>12</sup>のおろしに限る。

「辛い」  
「けど、キリッとします」  
「そう。この辛みの刺激が好きや」  
「おお、辛っ！」

---

<sup>11</sup>てん - ぐ【天狗】深山に棲息するという想像上の怪物。人のかたちをし、顔赤く、鼻高く、翼があつて神通力をもち、飛行自在で、羽団扇はうちわをもつという。今昔物語集 20「今は昔、天竺に一有けり」[株式会社岩波書店 広辞苑第五版]

<sup>12</sup>■からみ - だいこん【辛味大根】大根の栽培品種。京都地方で栽培されるふろ吹き用の品種。(C)小学館

「これで、しゃっきり、プロジェクトに取り組める」

「はい」

まだまだ本格的な春は遠いが、心が暖かいのは、地球温暖化や、酒のせいばかりではない。(Sunday, February 11, 2007)



## 納豆狂騒曲

中 川 房 代

朝食はご飯と納豆、と6年程前から決めている。「決めている」というのは、好きだから食べ始めたというより「身体によいと思ったから食べることにした」という方があたっている。6年前、手術のために3週間ほど入院をした。その時、仲良くなった同室の女性から薦められ、それ以来ほぼ毎朝食べている。一時期、銘柄や豆の大きさとかにも凝って通販や何かでいろいろ試した時期もあったが、最近は極めてシンプルに、どこのスーパーでも売っている超小粒3パック68円とか100円とかという山積み商品を買っている、が。

今年は年明けからずっと留守にしていた。1週間ぶりに自宅に帰った1月8日、買い物に行くと、納豆がない。売り場が換わったのかなと思い、店員に聞くと「売り切れ」だと言う。まあいいや、明日買おう！と思って翌日行くと、また売り切れ。別のスーパーにも行って見たが、そこでも売り切れ。これは何かあるぞ、と思っていると、あの例のテレビ番組の影響だった。それから約2週間、我が家は納豆なしの朝食が続いた。ところが、1月24日、学校行事のスキー学習から帰ってくると、突如納豆の山積みが復活していた。

普段から納豆を食べている私には、訳も分からず迷惑を被っただけという感があるが、それでも「ダイエット」というキーワードはなかなか魅惑的だ。食事制限や運動といった「面倒なことはイヤだが痩せたい」「簡単に痩せる方法がある」と言われれば飛びつきたい気持ちは大いにわかる。実際、私自身も、過去そのテレビ番組を観て食べ続けた食材もあった。ただ、あいにく痩せるところまで続けることはできなかった。あれも「捏造」だったのかも？

私たちは、普段買い物をするときには、特にある程度のお金を使って買うときには何を基準に選択をするだろうか。例えば車とか電化製品を買うときには？メーカー、サイズ、機能、維持費用などを調べ、予算や自分の希望と照らし合わせ、他の製品と比べ、実際に見て決めるだろうか。ネットでの評判や、信頼できる人や店員の意見を参考にして決めるだろうか。勿論一番重要なのは、真実で信頼できる中身であるのは自明だが、それに付随する情報や離れて一人歩きをする評判というものも大切な時代になっていると痛感する。またそれを判断し、見抜く力

をつけていくことも。

NPO 組織も同じである。やっている事業が真実で信頼たり得るか。それがどうネットワークを広げ、いかに社会の信頼を得ているのか。特に大きな事業を始めるには、お金が必要だ。会員だけでなく、直接面識のない人たちや企業や団体から資金を得ることも必要になってくる。

私たちは、どうか。

NPO を作ったのは、社会貢献をしたいと思ったからだ。この7年間で様々な事業を行い、それらが社会に貢献してきたという確信はある。しかし、まだ日本社会に、世界に向けて確実で具体的なモノを十分に発信・提供してきたとはいえないと思う。e-dream-s は、本来の趣旨を十分実現してきたとはまだまだ言えない。

日本国内だけでなく、世界の多くの人々と手をたずさえ、また自分の立場という枠組みを越えて幅広いネットワークを組み立て、その情報を提供しあい、共有し、「国際化」「教育」「コミュニケーション」について考え、活動を行うことが重要です。

--- 特定非営利活動法人イー・ドリームズ「設立趣旨書」より

特に、私たちが一番意義ややり甲斐があると考え、事業内容の一番に挙げている「教育支援事業」の部は、まだこれから構想・企画するという段階だ。

<教育支援事業>

世界（特にアジア地域）の教育機関・教育関係団体と相互扶助的なパートナーシップを結び、人材、モノ、ソフトなどの面において協力し、共同で学校施設や小中高校生対象の研修プログラムの主催などを行います。

--- e-dream-s ホームページ「e-dream-s 事業内容」より

3月で満7歳を迎える e-dream-s。人間なら小学生だ。そろそろ親から自立・自律し始め、自分自身の判断を持ち、世界を広げていく時期だ。e-dream-s は、この7年で基礎体力をつけてきた。ある程度の認知度や信頼感も得てきた。昨秋には、設立来の中心事業であった@aglance 事業に区切りをつけた。「新規事業を！」と言い続けても久しい。「e-dream-s 通信・1月号」(No.73 2007年1月21日発行)の「夢の体力」(辻代表理事)、「進路の研究」(井川顧問)の記事にもあったよう

に、2007 年は私たちが持っている“夢の体力”を、現実のモノやカタチにするための年にしたいと願う。これは、私の決意表明にもなるのだが、想っているだけ、考えているだけでなく、カタチにするための一歩を踏み出したい。特に、「教育支援事業」の部に着手し、具体的に行動に移す1年と位置づけたいと考えている。

## Rip Van Winkle が見る 21 世紀の学校

塚本美紀

ワイオミング州の学校とのテレビ会議の準備をしているとき、一人の生徒が「先生、ファストプランツのデータをエクセルでまとめているんですけど、ここに順番に数値をいれていくには、どうしたらいいですか。」と言った。ファストプランツとは、スペースシャトルでも使われている実験用の植物である。私の勤務校では、環境の違いが植物に与える違いを調べるためにワイオミング州のパートナー校と条件を設定して栽培し、その結果を報告しあっている。エクセルを使うことはあるものの、そんなに得意でない私は、「えっと、その場合は、ほら、式をつくって、ここをこうしたら、たしか、、、。」などとしどろもどろなってしまった。私の答えが終わらないうちに生徒は、「あっ、わかった!」と言って、かちゃかちゃとキーボードをたたき、さっさと問題を解決してしまった。

そばにいたALTのMさんとJ君と、「私たちと違って、彼らはITのネイティブだね。」などと話した。とはいえ、彼らは20代前半。小学生の頃からパソコンを使っていたという。私からすれば彼らだって十分「ITネイティブ」である。しかしそんな彼らにとっても、今の高校生は彼らより数段上の「ITネイティブ」らしい。Mさんは、「今の若い子みたいに、ちゃちゃっと何でもこなせないのよね。」と言う。Mさんの名誉のために付け加えるが、私から見ればMさんは何でも「ちゃちゃっとこなし」、授業にもコンピュータを十分活用している。情報化の速度は目を見張るものがあるよね、などと話していると、J君が「そうそう、Timeで面白い記事があったよ。21世紀の学校についての記事。すごく面白かったから、明日持ってくるよ。」と言った。

翌日、J君が持ってきたのはTimeの2006年12月18日号で、付箋が貼られていた記事のタイトルは”How to Bring Our Schools Out of the 20<sup>th</sup> Century” (Claudia Wallis and Sonja Steptoe)。その記事は以下のように始まっている。

There's a dark little joke exchanged by educators with a dissident streak: Rip Van Winkle awakens in the 21st century after a hundred-year snooze and is, of course, utterly bewildered by what he sees. Men and women dash about, talking to small metal devices pinned to their ears. (中略) But when he finally walks into a schoolroom, the old man

know exactly where he is. “This is a school”, he declares “We used to have these back in 1906. Only now the blackboards are green.”

思わずニヤリとしてしまったが、学校にかかわるものとして、笑って見過ごすことはできない。学校にもいろいろな変化が起こっているものの、社会の変化に比べたら微々たるものだろう。確かに、私はいまだに授業中の多くを黒板（緑板？）を使って過ごしている。変化することだけが良いことだとは思わないが、学校が社会の変化についていけているか、社会の要請に応えることができているか、この問いかけは常に忘れてはいけないのだと思う。Rip Van Winkle が次の眠りから覚めて、私たちの学校を見たときには、「僕らの頃と同じ。」などとは、決して言わせたくない。彼に見せたい21世紀の学校を作るために、動き出さなければ、と思う。

#### 編集後記

先月号を読んで、「夢」について改めて考えました。日々追われている目の前のことの延長線上に「夢」があるのとないのでは、生き方が全く違ってくると思いました。

(道面和枝)